余滴

国立病院機構千葉医療センター　増田政久

先日当センター附属看護学校で入学式が執り行われた．まるで台風を思わせるひどい天候の中，78名の新入生がめでたく入学を許可された．ご父兄の顔からもほっとされている表情が読み取れ，まずはお祝い申し上げたい．

勤務が過酷である，汚い，給料が安いなどといった働く環境面からの理由や看護学部や看護大学・短大に進学する学生が増加する傾向にあるため，専修学校を志望する学生が減少しているといわれている中，3年後の国家試験に合格し，看護の道を志そうと考え（少なくとも受験前は），入学してきた学生を目の当たりにすると，感慨深いものがある．医療不信，医療崩壊，医師・看護師不足，たらい回しなど楽しくない活字を目にしない日がない昨今では，なおさらである．

このような祝辞があった．無量寿経という仏典のなかで説かれている和顔愛語という言葉が看護にとって非常にふさわしい言葉であるという内容であった．恥ずかしながら私，出典を含め，この言葉を知らなかったので，早速，インターネットで検索してみた．何も持たずとも穏やかな表情と優しい言葉は人を和ませることができるという意味で，このような気持ちを忘れないでほしいということである．医師や看護師からの病状説明や疼痛などからさまざまな不安に陥っている患者さんにとって，和顔と愛語は治癒を促進する力になるであろうことは想像に難くない．しかし一方，このような祝辞が述べられることは，実際の医療現場には和顔も愛語も少ないということかもしれない．

昨年秋，私が尊敬する，肺移植や肺塞栓症（とくに慢性肺動脈血栓塞栓症）の手術では世界的な実績を持つDr. JamiesonがSan Diegoから学術講演会で千葉に来てくれた折，時間の合間を縫って，千葉医療センターをみたいというので案内をした．古くて狭隘（きょうあい）な施設を前に，建て替え計画に苦労していることや大変さを説明したが，彼はそのようなことに全く興味を示さず，帰りがけになぜここのスタッフの多くに，仕事中笑顔がみられるのはなぜかと質問され，恥ずかしくなった自分を同時に思い出した．

今，行政が医療トラブルに対して，後付けのようにやたらとマニュアルの導入や制度の変更を推進したり，医療従事者とくに勤務医の待遇面を整えようとしているが，やはり人間の気持ちがすさんでしまったら効果はない．不満は当然あるだろうし，感じ方も人それぞれである．その状況の中で少しでいいから自由人でいられる時空間や心理状態を持つようにすることが個々には必要なことだと再認識している．